

「がん難民」をつくらないために標準治療^{プラス}

統合医療で がんに克つ

2025

12
vol.210

特集

シリーズ 医療の現場から

ナカムラクリニック

中村 篤史

院長に訊く

体に優しく負担のない治療で免疫を高めることが
治癒への道だと思います
～「なぜがんになったのか」を考えてみる必要が
あります

特別 インタビュー

セルメディシン株式会社

大野 忠夫

代表取締役・薬学博士に訊く

私のがん治療サポート

自家がんワクチンによる膠芽腫を対象とした医師
主導第Ⅲ相治験が2020年から始まっています

あした死ぬとしたら 今日何をやる

嶋田 裕 医療法人社団三裕会 嶋田外科医院 京都大学大学院ナノバイオ医薬創成科学産学協同講座教授

がん経験が私に「本当の医療の姿」を教えてくださいました

古田 一徳 医療法人ケイイーふるたクリニック メディカルブランチャ表参道理事長

「がんには言い分がある」 ～がんもまんざら悪くない～

船戸 崇史 船戸クリニック院長 リポーン洞戸代表

「治すから、共に生きるへ」 医師として、がん患者として見つけた真実

小林 正学 岡崎ゆうあいクリニック院長



治すから寄り添うへ がんになった医師が気づいたこと

がん経験が私に

「本当の医療の姿」を教えてくださいました

古田 一徳

医療法人ケイイーふるたクリニック
メディカルプランチ表参道理事長

.....
はじめに

私は外科医師として長年にわたり、がんをはじめ多くの病と向き合ってきました。北里大学病院外科での勤務医時代も、その後「ふるたクリニック」を開業してから「治す」こと、それが医療の目的であり、自分の使命だと信じて疑いませんでした。しかし、2024年7月に思いがけず私自身

が「上咽頭がんステージⅢ」と診断されたとき、その信念は大きく揺らぎました。

それまで自分なりにいろいろと検査はしていましたので、自分は大丈夫と思っていました。がんが発見される少し前の2024年3月に、右頸部のリンパ節が1カ所だけ少しはれていたのですが気にとめていませんでした。

今回のこの病気、病名も正直、

まったく頭に浮かんでいませんでした。医師としての知識があるほど治療の厳しさをあらかじめ理解できるので、がんと診断され告知されたときはショックでした。それでも実際に自分が患者として体験した放射線治療と抗がん剤治療の副作用は、想像をはるかに超えるものでした。

喉の痛みで水を飲むことすらつらく、唾液もでなくなり、味覚、



嗅覚は失われ、体重は減り、体力もなくなり心身ともに消耗しました。「患者さんは、こんな苦しみのなかで頑張っていたのか」と、これまでとはまったく違う視点で「痛み」の本当の意味を知りました。

.....
苦しみのなかで見えた
「支えられる医療」

上咽頭がんの治療では抗がん剤

治療のために短期入院を3回しました。放射線治療は、平日連日で33回（66グレイ）を上咽頭周囲に照射しました。のど、首の皮膚、耳、鼻領域にあたる放射線の副作用で炎症、やけどが治療後にもおこり、痛みには本当につらい思いをしました。あまりのつらさに治療の途中、私はしばしば心が折れそうになりました。

そんなとき支えてくれたのは、家族やスタッフ、同僚医師、そして患者さんたちからの温かい言葉でした。「先生、大丈夫ですか、心配しています」「先生、早くよくなってください。先生がいないと困ります」などなど——その言葉がどれほどの力をくれたか、言葉では言い尽くせません。

私は長い間、医師として「支える側」に立ってきました。しかし、この経験を通じて「支えられる」ということの尊さを初めて深く知りました。

医療とは決して一方通行ではなく、人と人との信頼の絆の上に成り立っている。「治す」だけでなく「寄り添う」ことの大切さを、身をもって学んだのです。

2度目の危機——敗血症性ショック

上咽頭がんの治療後、副作用が大変でしてしたが、ようやく体調が落ち着き始めた2025年4月中旬でした。私は突然、微熱と全身倦怠感に襲われ、半日の間に急激に意識を失いかけて、北里大学の救命救急センターにお願いして早朝受診させていただきました。

救命救急のベッドにたおれこむようにやっと着き、緊急の血液検査、CT検査からの診断は「敗血症性ショック」「敗血症性心筋炎」「急性心不全」でした。意識がもうろうとするなかで、その診断に驚いたことを覚えています。「命の瀬戸際にある大変な状況で、先生から『あと半日遅れたらもう助からなかったかも』と言われたほど重症でした。このときに、まったく動けず喋れない心細い状況や臨死体験のようなもので経験しました。

まさに命の瀬戸際でした。1週間のICUでの救命集中治療、その後2週間の入院を経て、スタッフ皆さんのおかげで、奇跡的に一命を取り留めることができました。皆様には心から感謝しています。

ベッドの上で、天井を見上げながら思いました。「これほど多くの人に支えられて自分は生かされている」——。治療にあたった医療スタッフの懸命な姿、周りの皆さんの祈るような表情。それらすべてが「いのちのつながり」そのものでした。医師として多くの命を救ってきたつもりでしたが、このとき初めて「命を与えられる側」の感謝と祈りを知りました。

統合医療との再会——生きる力を再び灯すプロセス

一命をとりとめて何とか退院しましたが、筋力のおとろえもあり、体重は77kgから61kgに減っていました。ICUのベッドに1週間じっと寝ていたのも、はじめは体力の衰えにより、まったく動けませんでした。その後、心臓リハビリを継続して、少しずつですが動くようになっていきました。

しかし、不思議なことに身体は回復とともに、「医療とは何か」「人を癒すとはどういうことか」をもう一度見つめ直す時間にもなりました。

私は以前から、クリニックでオゾン療法、高濃度ビタミンC点滴、NMN点滴、栄養療法、再生医療、

さらにはCBDによるメンタルケアなど、統合医療を臨床に取り入れてきました。それらは西洋医学を否定するものではなく、「人が本来もつ自然治癒力を支える」ためのもう一つの柱です。

私は自らもオゾン療法やビタミンC点滴を継続しました。同時に腸内環境の改善や、食事、睡眠、瞑想、呼吸法など、「生き方そのもの」を整えることに意識を向けました。体が少しずつ元氣を取り戻すと、不思議と心のなかにも光が差し込んできました。統合医療は、単に「治療」ではなく「生きる力を再び灯すプロセス」なのだと気づきました。

がんを経験して初めてわかった「寄り添う力」メンタルの重要性

医療の現場では、どうしても「結果」が求められます。「がんが小さくなったか」「腫瘍マーカーが下がったか」などです。けれども、患者さんの心のなかにある「恐れ」や「孤独」には、数値では測れない深い痛みがあります。病に向き合う人にとって、医師や看護師、医療スタッフの一言、温かいまなざしは、「薬にも勝る力」になり

ます。

「あなたは一人じゃない」——この言葉だけで、人はもう一度、生きる勇気を取り戻すことができ。今回の病気をしたことで、自分は身をもつて感じました。

がんを経験してわかったのは、医療の本質は「技術」よりも「共感」だということでした。痛みを理解しようとする心、患者さんの人生に寄り添おうとする姿勢、そこにこそ「癒し」が生まれるのだと思います。

命の危機に瀕した大変な事態でしたが、今思えば、患者さんの気持ちが良いわかる非常に貴重な経験といえます。

「治す医療」から「生きる医療」へ

がんになって以来、私は「医師である前に人間である」ことを強く意識するようになりました。病気は、決して「敵」ではないのではないかとも思ったりします。それは、生き方や心の在り方を見直す「きっかけ」をくれる存在でもあるからです。

がんを経験した今、私は患者さんにこう伝えたいのです。「病気を恐れず、自分を信じてください。

そして、あなたを支える医師、医療スタッフや家族、仲間を信じてください」と。

がんは確かに厳しい試練ですが、そのなかから人は新しい強さと優しさを見つけることができます。医師として、そして同じ患者として、私はこれからも「寄り添う医療」を実践していきたいとあらためて思いました。

おわりに

私は、がんと敗血症という2度の生死の境を経験しました。それはもちろん決して望んだ出来事ではありませんでしたが、その体験が私に「本当の医療の姿」を教えてくれました。

医療とは、いのちといのちの対話です。統合医療も最先端医療も、すべてはその対話を支える道具にすぎません。最も大切なのは、患者さんと医師が心を通わせ、「生きる力」を信じ合うことだといまさらながら思います。

— 治すから、寄り添うへ —

この言葉を胸に、私はこれからも医療の現場に立ち続けたいと思います。今、生かされていることに、みなさんに日々感謝しています。

International Society for Orthomolecular Medicine (ISOM)

オーソモレキュラー医学 ニュース配信サービス

<http://www.iv-therapy.jp/omns/index.html>

国際オーソモ

検索

ノーベル賞を2度受賞したアメリカのライナス・ポーリング博士は1968年に科学誌サイエンスで、「体の中に自然に存在する物質（ビタミン、ミネラル、アミノ酸など）を分子レベルで最適な量を投与して病気の予防と治療をする」という意味のオーソモレキュラー療法を提唱しました。しかし、オーソモレキュラー療法は多くの専門家に認められた有用な治療法でありながら、メディアはその効果を正しく伝えず、時には否定的な報道をしています。オーソモレキュラー医学ニュース配信サービスは編集主幹に栄養療法で世界的に著名なアンドリュー・ソウル氏を迎え、オーソモレキュラー療法に関する正しい情報やオピニオンを世界に配信、その内容は栄養療法の専門家に高く評価されています。点滴療法研究会では2012年よりオーソモレキュラー医学ニュースを翻訳し、日本語版として専門家やメディアに向けて配信しています。

日本語版 総監修：柳澤 厚生（国際オーソモレキュラー医学会・点滴療法研究会 会長）

連載
第47回

統合医療

あきらめない

患者さん本位の医療とは

川崎市百合ヶ丘で「みなさまに本当に役立つクリニック」をモットーとした「ふるたクリニック」の理事長をしています。今回は、「老化細胞除去療法」により、老化細胞を掃除できるようになってきたことについてお話しします。



古田 一徳

医療法人社団ケーイー
ふるたクリニック 理事長

老化細胞除去療法とは

老化を治療しよう

私たちの体は毎日新しい細胞が生まれ、古い細胞が入れ替わることで健康を保っています。しかし、年齢を重ねると一部の細胞が「老化細胞」と呼ばれる状態になります。老化細胞は、もはや正常に働かず、分裂もせず、体にとって役に立たない存在です。それだけなら無害に思えるかもしれませんが、実はこの細胞が大きな問題を引き起こします。

老化細胞は周囲に炎症物質を放出

し続け、まわりの細胞や組織に悪影響を及ぼします。たとえば、肌の弾力を失わせたり、血管や関節にダメージを与えたり、免疫の働きを弱めたりします。こうした影響が積み重なることで、シワやたるみ、がん、動脈硬化、糖尿病、認知症など、老化に関連するさまざまな病気につながるかと考えられています。

そこで近年注目されているのが「老化細胞除去療法（セノリティック

ス療法）」です。これは、老化細胞だけを狙って取り除く薬や方法を使い、体のなかの「悪玉細胞」を減らすという試みです。「セノリティックス」とは、加齢とともに体内に蓄積し、老化を加速させると考えられている「老化細胞」を選択的に除去する薬剤や化合物の総称です。この言葉は「老化（senescence）」と「破壊・除去（lysis）」を組み合わせた造語で、健康寿命の延伸や加齢に伴う疾患の予防・治療への応用が期待されています。

マウスを用いた実験では、老化細胞を取り除くと筋肉の力が回復したり、毛並みが若々しくなったり、寿命が延びたりする効果が報告されています。また、心臓病やアルツハイマー病の進行を抑える可能性も示されています。まさに「体のリフレッシュ」を実現する研究として、世界中で大きな関心を集めています。老化の原因に直接アプローチできる可能性がある点で、これまでのアンチエイジング療法とは一線を画しています。

アンチエイジングと聞くと、これまでは食事や運動、サプリメント、美容医療など「外からのサポート」が中心でした。一方、老化細胞除去療法は、体のなかで老化を進めている根本的な要因をターゲットにする新しいアプローチです。

私たちの体の細胞は、年齢やストレス、放射線、化学物質などで「老化細胞」になります。老化細胞は増えることはできませんが、周囲に炎症物質を出し続ける（SASP…のちに解説）ため、まわりの細胞を弱らせたり、がんの成長を助けたりしてしまいます。たとえるなら「壊れた電化製品が家のなかで煙を出し続けるようなもの」です。

SASPとは「Senescence-Associated Secretory Phenotype」の略で、細胞老化（Senescence）によって増殖能力を失った細胞が、周囲の細胞に影響を与えるさまざまな因子（サイトカイン、ケモカイン、増殖因子、タンパク質分解酵素など）を分泌する現象です。SASPは、免疫細胞を老化細胞に動員して除去する有益な役割も持つ一方で、慢性的な炎症、血管新生、がんの増殖などを促進する有害な役割も持つため、老化性疾患の発症や悪化に関与することが注目されています。

セノリティック療法 （老化細胞除去療法） とは？

セノリティック療法（老化細胞除去療法）とは、老化細胞だけを選んで取り除く治療です。代表的な治療法としては、「ダサチニブ+ケルセチン」などの薬剤を静脈点滴で行い

ます。

●ケルセチンの老化細胞除去に関するメカニズムと効果

●老化細胞の除去メカニズム…ケルセチンは野菜に含まれるポリフェノールの一種で、主にタマネギに多く含まれている成分です。老化細胞をアポトーシス（自然死）誘導することで、体外への除去を促す働きが研究されています。

●抗酸化・抗炎症作用…強い抗酸化作用や抗炎症作用を持ち、老化の原因となる酸化ストレスや炎症を抑える効果も期待されています。

●医療分野での活用…医療分野では、抗がん剤「ダサチニブ」と併用することで老化細胞除去に高い効果があることが示唆されています。

●美容分野での活用…美容分野でもエイジングケア成分として、肌のハリや透明感を維持するために化粧品に配合されるケースがあります。

●ダサチニブの老化細胞除去作用のメカニズム

老化細胞のメカニズム…老化細胞は分裂を停止したまま体内に残り、炎症を引き起こす物質（SASP）を分泌し、周囲の正常な細胞に影響を与えます。ダサチニブは、老化細胞が生き残ろうとするシグナルを

これまでの、個々の加齢性疾患に対して個別の治療法を確立する必要があったが、「老化」を共通の病因と見なすことで、同じ治療で多くの疾患をターゲットにすることができる。

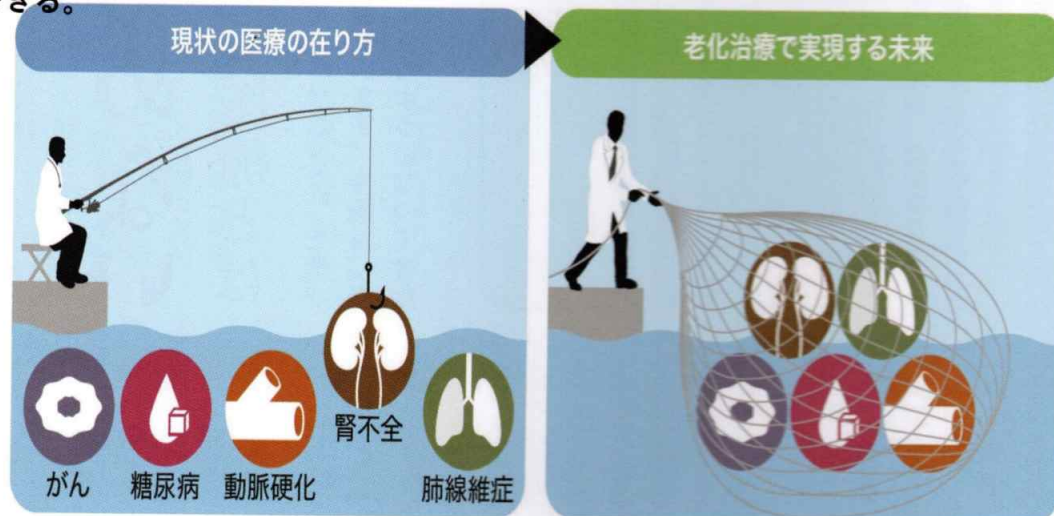
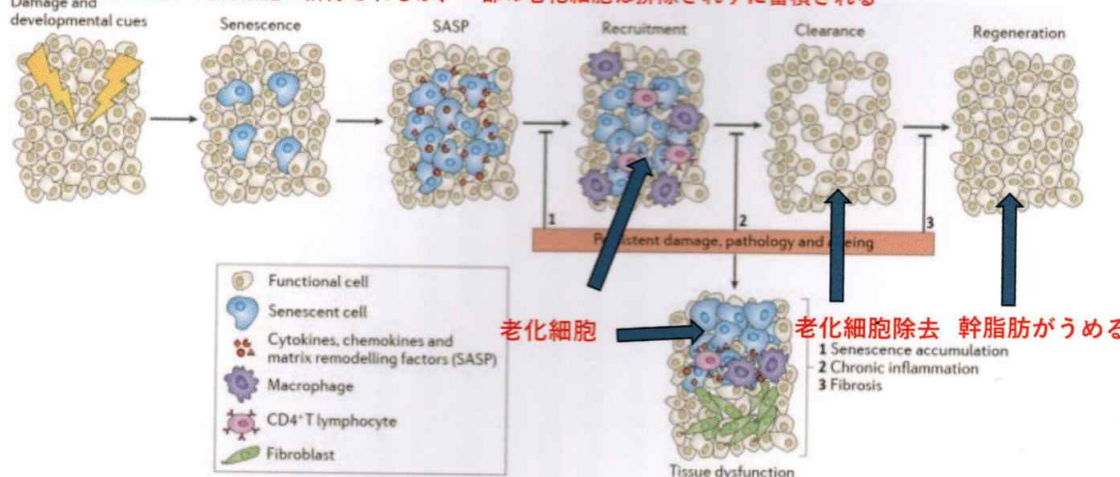


図1 老化治療のコンセプト

通常は老化細胞は免疫細胞に排除されるが、一部の老化細胞は排除されずに蓄積される



老化細胞はPDL-1などを発現し免疫細胞による障害を回避しつつ、SASPの分泌により慢性炎症を引き起こす
Zhang, Qixiong, et al. Targeted delivery strategy: A beneficial partner for emerging senotherapy. Biomedicine & Pharmacotherapy, 2022, 155: 113737.

図2 老化細胞が除去された部分は正常な幹細胞に置き換わる

●具体的な研究例

●2型糖尿病性骨粗鬆症…マウスを用いた研究では、ダサチニブとケ

ブロックすることで、老化細胞を自滅（アポトーシス）に導きます。
ダサチニブは、老化細胞の蓄積が関与すると考えられていて、アルツ

ハイマール病、加齢関連疾患、変形性関節症など、さまざまな疾患に対する予防・治療薬としての可能性を秘めています。

